

# 国際交流基金関西国際センター 平成12年度研究企画推進班活動報告

和泉元 千春・上田 和子・大隅 敦子

## はじめに

国際交流基金関西国際センター(以下、関西センター)は平成12年度をもって設立4年めに入り、日本語研修事業件数、年間受け入れ研修参加者数は年々増加してきている<sup>1)</sup>。それに伴い、研修を担当する職員や日本語教育専門員(以下、専門員)にとって、業務範囲がより広範かつ多岐にわたってきたこと、また担当研修以外の他研修について、担当者間の相互的な情報交換の機会が不足していること等の問題が生じてきた。そこで、さらに質の高い研修の実現にむけ、関係者間の連携強化の必要性が専門員中心に痛感されるようになった。これらの状況を踏まえ、関西センター研修事業課では平成11年9月に研究企画推進班を設置し、以下のような目標を設定して活動を行ってきた。

専門員および研修に携わる職員等の指導・運営技術の向上

教材、教授方法、活動等に関する研修間の情報共有

共通教材作成の基盤作り

本稿では関西センター平成12年度研究企画推進班の活動内容とその役割を報告する。

## 1. 平成12年度研究企画推進班の活動概要

平成12年度は研修事業課職員1名、専門員3名が研究企画推進班の担当に当たった。まず関西センターの過去3年間を振り返り、その間遭遇してきた問題点を洗い出し、その改善に向けて協議するために、1回90分の研修会(年間合計7回)を企画、実施した(表1)。また出席者から研修会終了後に自由記述形式で意見を徴集し、それとともに講師・発表者への追加質問およびその回答を含めた報告書を作成して、センター関係者全員の情報共有を図った。さらに、研修会の案内とその報告を日本語国際センターとのネットワークコンピュータ上にも掲示した。

	日時	演題	講師または発表者
第1回	2000年11月27日	アフリカ地域事情	戸田真紀子 (天理大学国際文化学部助教授)
第2回	2000年12月19日	H12年度日本語履修大学生 訪日研修 SG 報告	平成12年度SG担当専門員3名
第3回	2001年1月23日	研修における交流活動報告	平成11年度、平成12年度専門日本語研修担当専門員4名 総務課職員1名
第4回	2001年2月2日	内容中心日本語教育 専門への橋渡し教育として	横田淳子 (東京外国語大学日本語教育センター教授)
第5回	2001年4月17日	ロシア巡回セミナー およびマレーシア出張報告	浜田盛男 関西国際センター専門員)
第6回	2001年5月22日	旧ソ連諸国地域事情	境田徹 関西国際センター専門員)
第7回	2001年6月20日	『続 教科書を作ろう』完成報告	古川嘉子、坪山由美子 (日本語国際センター専任講師)

(表1 平成12年度研究企画推進班研修会内容一覧)

以下に各研修会の報告をする。

## 2. 地域事情

関西センターでは世界各地から研修参加者を受け入れているが、専門員らがそれらの国や地域事情を十分把握しているわけではない。研修の運営に携わるすべての者が、研修参加者を理解するために、その出身国の背景知識を持つことは、研修効果を上げるのに有効であることは言うまでもない。そこで平成12年度研究企画推進班では、今後研修参加者の増加が予想されるアフリカ諸国と旧ソ連諸国についての地域事情講演会を企画、実施した。講演後、出席者からは「(それぞれの)地域への理解を深めるための効果的なステップになった」という意見が多く聞かれた。また「東欧、中東、中南米に関して同様の研修会をしてほしい」という具体的な要望も出され、今後も地域事情を学ぶ場に対する期待が確認された。

## 3. 担当研修の枠を超えた情報の共有

関西センター立ち上げの3年間は、各研修でそれぞれのコース運営の型を模索した時期であり、研修間の情報交換にまで目が向けられなかったというのが実情であった。そこで平成12年度では、各研修の方針について共通認識をもつこと、コースデザイン等の研修に関わる情報を共有することを目的に、日本語履修大学生訪日研修<sup>2)</sup>( Student Group; 以下SG )の研修概要と、各研修で行われている外部団体との交流活動を研修会のテーマとして取り上げた。

### 3.1 平成12年度日本語履修大学生訪日研修報告

日本語履修大学生訪日研修は、各コースとも研修参加者が20名前後、期間が6週間から7週間という短期の日本語研修である。年度内に数研修が実施されることになるため、多くの職員、専門員がその運営に関わる可能性が高い。しかし12年度は各研修の実施時期に多少のずれがあり、また研修参加者の日本語学習歴、言語背景などの相違もあったため、事前に研修間での情報交換や調整を行うことは困難だった。そこで研修会では平成13年度にも継続して研修実施が決定している「南アジアコース」、「特定地域コース(ロシア、ベトナム等)」、「中南米コース」の3研修を取り上げ、それぞれの報告を行った上で、今後のプログラム調整のための情報交換が行われた。

まず平成12年度担当者が各研修の研修参加者の特色、日本語カリキュラム等のコースデザイン、外部団体との交流活動、評価について概略を説明した(表2)。3研修では、研修参加者の日本語レベルは若干異なっていたが、いずれも日本語文法能力の向上を主たる目的とはせず、滞日型研修の特色を生かすことを研修の方針としていた。具体的には、自国で学習してきた事項の整理と自己評価、運用能力を身に付けるための場の提供、発表活動などの総合的な日本語運用能力の活性化、という点に主眼を置いたコースデザインがなされていた。これらの諸点をふまえ、日本事情の内容を主とするトピック別学習、および学習支援の一環としてのコンピューター技能(日本語入力や情報検索)、学習ストラテジーや言語技能(発音、漢字辞書の使い方など)の3本立てでカリキュラム編成がおこなわれていた。

研修の実施において、来日前及び研修開始時には、研修参加者からは新しい文法事項や漢字など、知識を中心としたカリキュラムへの要望が高かった。しかし、上述のように研修参加者が持っている日本語能力を活かして運用能力を高める方策をとったほうが、結果的に学習効果も研修参加者の満足度も高かったことが、いずれの研修においても確認された。今後は研修会で見出された共通点に従い、研修実施の円滑化を目指して、SG研修のモデルとなるようなコース・デザインを決めていくことも可能であるとの認識が専門員間で形成された。

一方、発表者からは各研修共通の運営上の問題点(他研修との兼任など担当者の負担、センター外部団体との交流会実施方法の調整、LL教室の環境整備等)も指摘されたため、総務課、研修事業課側の協力を要請した。また研修旅行や文化紹介は、同時期に実施されている研修間の共通プログラムとすることができるように、各研修間の情報交換とスケジュール調整を密に行うことを確認した。

以上のように、本研修会では日本語研修の内容だけでなく、センター関係者がそれぞれの立場からSG研修を振り返り、その質の向上に向けて話し合うことができたという点で大きく評価できる。また専門員からは「問題の具体的な解決への糸口と、今後への展望が開けたという意味で、大変有意義な研修会であった」という感想が多く聞かれた。

日本語国際センター紀要 第12号

研修概要項目		報告内容
1.対象		南アジアコース : 日本語を学習している大学生(専攻は問わない) 中南米コース : 日本語能力試験3,4級程度の日本語副専攻大学生 特定地域コース : 日本語能力試験2,3級程度で2/3が日本語専攻大学生3,4年生
2.日本語クラス	方針	自国で学習した事項の整理と自己評価 運用能力を身に付けるための場の提供 総合的日本語運用能力の活性化
	カリキュラム 編成	< 日本事情の内容を主とするトピック別学習 > ・日本語レベル別クラス編成(南アジアコース、中南米コース) ・日本語レベルは特に考慮せず、コース内親和をはかるためにクラス替え(特定地域コース) ・情報提供者として日本人参加(中南米コース) < コンピューター技能 > ・日本語入力から簡単なインターネット検索、日本語でのメール交換の練習(南アジアコース、中南米コース) ・日本語入力と画像取り込みの簡単な講習(特定地域コース) < 学習ストラテジーや言語技能の習得 > ・継続学習支援のための「学習ストラテジー」紹介(南アジアコース) ・発音、インタビュー技術、漢字辞書の使い方(中南米コース) ・発音、その他は個別指導で対応(特定地域コース)
	日本語能力 向上への対応	・コンピュータークラス課題添削による文法面のケア(中南米コース) ・個別指導による文法面のケア(特定地域コース)
3.交流活動	交流相手	・日本語教育学専攻大学生、・外国語学専攻大学生、・地元国際交流団体、 ・日本語教師養成講座受講者、・NPO(南アジアコース)
	交流内容	・ビジターセッション、・旅行ガイド、・授業参加、・野外炊飯(南アジアコース)
4.発表会		研修の総括としての最終発表会(全コース実施) ・情報収集(インタビュー等) グループ/個人で口頭発表またはポスター掲示 自国紹介発表会(中南米コース、特定地域コース合同)
5.評価		「研修参加者による自己目標設定」「研修参加者による自己評価コメント」 「教師による評価コメント」 ・シラバスに基づいた日本語技能一覧を使って自己目標設定、自己評価の参考とさせる(中南米コース) ・継続学習へのアドバイス(南アジアコース、特定地域コース) 研修開始時のインタビューと発表会録画ビデオ
6.成果物		・活動記録集(中南米コース、特定地域コース)
7.問題点等		研修期間が短い 短期研修の方針と限界をどのように理解させるか 交流相手の選定と継続したネットワークの構築をどのように行うか 研修実施時期の問題から担当者(非常勤講師を含む)の手配が困難 選考の段階で選考基準を満たす研修参加者を集めにくい 事務対応の際の使用言語について配慮が必要(中南米コース)

(表2 日本語履修大学生訪日研修概要)

### 3.2 研修における交流活動報告

関西センターで実施されている研修は、すべて宿泊型日本語研修である。したがって、日常生活においては日本人との交流の機会が基本的に少ない。そこで関西センターのすべての研修では、専門面でも日本語学習面でも、センター外の日本語環境活用の重要性が意識されており、各研修の目的に応じた交流活動が積極的にカリキュラムに取り入れられている<sup>(3)</sup>。そこで第3回研修会では、各研修の交流活動の目的を明らかにし、質の高い交流活動を円滑に行うため、平成11年度、平成12年度専門日本語研修(表3) および日本語履修大学生訪日研修で行われた交流活動の目的と概要について報告が行われた。また全研修参加者に対する共通プログラムとして、総務課が実施している交流活動もあわせて発表された。

各研修内で行われる交流活動は、研修参加者の 専門能力向上、日本語による発信、日本語会話力向上、および 地域情報収集のための場として位置付けられている。研修における各交流活動の位置付けの相違、あるいは研修参加者の専門性の違いによって、それぞれの研修では交流相手や活動内容、使用言語など様々な運営方法が用いられていた。改善点としては、交流活動にかかる諸手続きの簡略化、交流団体等情報の共有化、研修間共通プログラム化などが挙げられた。

一方、総務課主催の交流会は個別の研修を対象とするものではなく、全研修参加者を対象としたもので、その目的は 日本文化・社会を知る場、レクリエーション、地域の国際化への貢献の場として位置付けられている。研修参加者の多くは、自分の所属する研修の枠を越えたこれらの機会にも積極的に参加しており、その評価も高かった。

このような交流活動が有効に機能すれば、研修参加者はセンター内だけでなく、センター外の人々からも心理的支援を得ることができるようになるであろう<sup>(4)</sup>。宿泊型日本語研修の場合、<研修>の範囲は単に日本語学習だけではなく、研修参加者の生活にまで及ぶこともある。そこでは、職員、専門員をはじめ研修に関わるすべてのスタッフが連携し、協力体制を作り、異文化の中で研修に臨む研修参加者を支援するために、集団的・予防的アプローチによるネットワークを構築していく必要がある(井上1995)。

## 4. ネットワーク構築の場としての役割

以上報告したように、平成12年度の研究企画推進班研修会では、担当研修の枠を越えた情報の共有化の足がかりを作ることができたと評価できるだろう。共有した情報を検討し、専

門日本語研修の内容をより質の高いものにするための場として、今後も本活動の更なる充実が期待される。特に、本研修会がもたらした<共通認識>および<センター内ネットワーク構築>という成果は、専門員間だけに止まらない。職員・非常勤講師をはじめ研修に関わるすべてのスタッフの協力が得られたという点で、あらためてこのような場を共有することの重要性が確認された。

研修事業が質量ともに多様化していく中で、円滑に研修を進めていくためには、上述のようなネットワークの構築が欠かせない。様々な人間の集合体である関西センターで、予測される障害や葛藤、誤解を最小限にするうえでも、研修会活動を一例とする連携の場を設けることは非常に意義深い。さらにこのようなネットワークの構築や、研修事業の育成のためには、それぞれの立場で研修に関わる者の積極的な努力が重要であることは言うまでもない<sup>(5)</sup>。

<p><b>外交官日本語研修・公務員日本語研修(平成11年度)</b></p>	
<p>交流相手</p>	<p>イ 外交官等の大学生 年齢の近い日本人学生との交流、相互の学習言語の運用 第1回センター、第2回交流相手先、第3回京歌、第4回交流相手先 4回/各2時間程度 第1回英語による自由会話、第2回Language Exchange、第3回京都観光、第4回大学のゼミ(外交、ジャーナリスム)で発表(日本語)</p>
<p>目的</p>	<p>イ 外国語の大学生 日本語によるスピーチ発表 日本語によるスピーチ発表と交流先学生の異文化体験学習</p>
<p>場所</p>	<p>ウ フランス語専攻の短大生 日本語によるスピーチ発表 交流先 1回/2時間程度</p>
<p>回数/時間</p>	<p>1回/2時間程度</p>
<p>内容</p>	<p>交流先・歓迎挨拶(仏語)研修参加者:4名の自国紹介スピーチ、ブルティスカッション 事後感想交換</p>
<p><b>研究者日本語研修(H12年度)</b></p>	
<p>交流相手</p>	<p>イ 地元国際交流団体 地元在住の日本語教育経験者との交流、地域情報収集および日本語運用 センター内 1ヶ月に1-4回/各2時間程度 日本語での会話(近隣名所などの散策・他国際交流団体、研究関係者へ紹介)</p>
<p>目的</p>	<p>イ 研究者または研究対象者 専門分野関連情報収集、懇親 各研究機関 第二期の各研究機関 第二期、1回/2時間、月5回まで 日本語文献講話、論文作成補助、研究会参加など</p>
<p>場所</p>	<p>ウ 研究者または研究対象者 専門分野関連情報収集、懇親 各研究機関 第二期の各研究機関 第二期、1回/2時間、月5回まで</p>
<p>回数/時間</p>	<p>1ヶ月に1-4回/各2時間程度</p>
<p>内容</p>	<p>日本語での会話(近隣名所などの散策・他国際交流団体、研究関係者へ紹介)</p>
<p><b>司書日本語研修(平成11年度)</b></p>	
<p>交流相手</p>	<p>イ 日本語教師養成講座生 1.業務を離れて、日本人と会話する2神戸の街を案内してもらう センター、神戸市内 2回/11月の金曜日 10月センターで「私の図書館」スピーチ発表、懇親会、インタビュー。12月東京で忘年会に参加。懇親、研修旅行中の見学先、観光案内、業務情報交換等</p>
<p>目的</p>	<p>イ 図書館司書研修大学生 上級司書研修参加者 懇親、情報交換 センター 1回/1時間</p>
<p>場所</p>	<p>ウ 図書館司書研修大学生 実習指導、業務関連情報収集、交換、懇親 交流先 1回/2月3日 講義、見学、実習、懇親会 センター案内、懇談</p>
<p>回数/時間</p>	<p>2回程度</p>
<p>内容</p>	<p>10月センターで「私の図書館」スピーチ発表、懇親会、インタビュー。12月東京で忘年会に参加。懇親、研修旅行中の見学先、観光案内、業務情報交換等</p>
<p><b>大学院生日本語研修Aコース(平成12年度)</b></p>	
<p>交流相手</p>	<p>イ メーリングリスト参加者、外国語学履修大学生 地域社会でのネットワークづくり、地域情報収集 交流先 1回/来日最初の土曜日午前 地域ガイド</p>
<p>目的</p>	<p>イ メーリングリスト参加者、外国語学履修大学生 地域社会でのネットワークづくり、地域情報収集 交流先 1回/来日最初の土曜日午前 地域ガイド</p>
<p>場所</p>	<p>イ メーリングリスト参加者、外国語学履修大学生 地域社会でのネットワークづくり、地域情報収集 交流先 1回/来日最初の土曜日午前 地域ガイド</p>
<p>回数/時間</p>	<p>3回/3時間、1日</p>
<p>内容</p>	<p>自国紹介、料理紹介、言語紹介、最終発表会(コメント記入 個人的にメール交換)、研究に関する情報収集、訪問</p>

(表3 研修における交流活動内容一覧)

〔注〕

- (1) 本センターでは「専門日本語研修」と「日本語学習奨励研修」の2タイプの日本語研修が実施されている。H12年度の実施研修については「事業報告編」を参照のこと。
- (2) 平成12年度は、南アジアコース(5/15～6/23)16名、特定地域コース(ロシア、ベトナム等)(7/17～9/2)28名、中南米コース(7/17～8/25)22名、イタリア・レッチェ大学コース(10/20～11/18)19名の計4研修、85名の研修参加者を受け入れた。
- (3) 関西センターの外交官日本語研修あるいは司書日本語研修では、研修生が経験を通して現実から学ぶ場として在京大使館実習あるいは図書館実習を研修のカリキュラムに組み込んでいる。詳細については三隅他(印刷中)を参照のこと。
- (4) 中山(2001)は大学留学生のネットワーク機能の一つに「日本生活での心理的支え」を挙げている。
- (5) 本センターでは研修参加者の心理面のケアに関わるネットワーク構築について三重大学加賀美常美代氏を迎え、全スタッフを対象としたワークショップを実施している。

〔参考文献〕

- 井上孝代(1995)「外国人留学生の適応とメンタルヘルス」山本和郎、原裕視ほか(編)『臨床・コミュニティ心理学 臨床心理学的地域援助の基礎知識』pp.244-245
- Gehrtz三隅友子、上田和子、羽太園(印刷中)「関西国際センター日本語研修プログラムにおける実習の役割」『専門日本語教育における実習の役割』国際交流基金関西国際センター
- 中山亜紀子(2001)「短期留学生の対人関係に関する一試論」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第5号pp.59-72